

23.10.25
(水)

ニコデモ (3:1-21)

最高法院のメンバーであり、ユダヤ統治団体の一員であるニコデモは闇夜から（闇は罪悪と無知の象徴）イエスの許に来て、偉大な教師である彼に挨拶をします。イエスは、思いもよらぬ仕方でご自分が「神からの教師」であることを彼に示そうとしています。

神は天におられるので、神の国に入る唯一の方法は、上から生まれることであると述べて、イエスは話を始めます。

自然的段階つまり肉の段階にあるものは、引き上げられずに神の段階にまで達することは不可能です。そして、その引き上げは、天から人間の段階に下り、その後、再び天の戻り、彼と共に人類を天に引き上げる神のよって成就されるのです。つまり、受肉、贖いの死、そして昇天とうヨハネの神学全体を指しています。

この説教の中のキーワードは、3節の「から生まれることなしに」にあります。ギリシャ語では、「上から」と「再び」とは二重の意味をもつ同じ語です。

とにかく、ニコデモは、神から与えられた霊、もしくは神の息吹が、自然の生命の源であり、メシアの時代には、神が人々に清めの水を振りかけ、彼らの新しい霊を与えるであろうということ知っていたようです。

「風」と「霊」とは、ヘブライ語でも、ギリシャ語でも同じ言葉です。

ヨハネは「上げられる」という単語に「十字架に上げられる」とことと「天に上げられる」との両方の意味を込めています。

ちなみに、「あなたたちは、人の子を上げたときに初めて、『わたしはある』ということをして、また、わたしが自分勝手には何もせず、ただ、父の教えられておおりに話していることが分かるだろう（同上 8:28）。」と、

「わたしは地上から上げられるとき、すべての人を自分のもとへ引き寄せよう（同上 12:32）。」を、参照できます。

16節からは、受肉の重要性が発展した一人ごと（モノローグ）になっています。

「悪」は「闇そのもの」です。イエスとともに、光が暗闇の中にやってきました。しかし、暗闇は光を受け入れようとはしませんでした。そして、まさにこの拒否自体が、審判なのです。光と闇に分割された世界です。